

「夕餉ができたでー」

というたえの声で、ジヨアンが階下に降りていくと、板敷の間に食事を盛った膳が据えられていた。といつても、粟飯に薄い汁、漬け物、干し魚と簡素なものだ。泊まり客の商人や船頭などは、てんでに板敷に座り込み、膝の間に膳を抱え込んで飯をかつ込んでいる。女に酌をさせて酒を飲む者もいて、そう広くもない部屋はざわめきに満ちている。

そんな部屋の隅で、ジヨアンは行儀良く膳の前に膝を揃えて座った。

「パーデレさんは、何か食べたらいかんもんあるんかいな？ お坊さんは生臭もんはいかん言うけど」たえが気を遣って聞くと、ジヨアンは微笑んで首を振り、

「いいえ、私どもは、出されたものは何でもありませんがたくいただきます」

そう言うと、首から下げた十字架をまさぐり、胸の前で十字を切ると、両手を胸に当てて目を閉じ、静かに祈り始めた。

「天に御坐す我らが御親、御名を貴まれ給え。御代来たり給え。天において思し召すままなるごとく、地においてもあらせ給え。我らが日々の御養いを

今日我らに与えたたび給え。我ら人に赦し申すごとく、我らが科を赦し給え。我らをテンタサン（誘惑）に放したもうことなかれ。我らを凶悪より逃したまえ。あめん」

その姿を、たえは物珍しげに眺め、ジョアンの指が白く細いことに目をひかれた。おそらく農作業などとは無縁なのだろう、とふと思う。

祈りが終わると、たえが聞いた。

「それが天主教のお念仏な？」

「念仏……、まあそのようなものですが」

ジョアンは苦笑して、それでもいいねいに答えた。

「これは。パアテル・ナウステルと申しまして、我らが御主デウスに捧げる祈りでございます。我らの教えの、最も大事なるものでございまして、我らが日々生かされていることの感謝を込めて、朝夕に唱えるのです」

静かに膝をそろえたまま、おとなしく食事を終えると、ジョアンは膳を下げに来たたえに聞いた。

「あの申し、女将さん。連れが上で臥せております間、私はこちらで説教をしたいのですが、どこぞお借りできましようか」

「辻説法な？ そら、どこでもかまんけど。けどなあ」

たえはちよつと首を傾げて、気の毒そうに言った。

「その湊でも、よう遍路のお坊さんが立って説法しとるけど、よう聞つきよる人はおらんで。みな、せわしいさかいな。相手にされんでもかまんのやったら」

言いつのよう、最後の一言を付け加えた。この若い、おとなしげな青年僧の話など、気の荒い船乗りがまともに聞くように思えなかつたのだ。

ジョアンは首を振り、

「いえ、すぐには聞いていただけぬのは、我ら心得ておりますので。されど、お坊様がよう来られますか。それは、ちと……」

そう言葉を切つて、少し眉をひそめた。

「お坊さんがおつたらいかんのな？」

「我らデウスの教えをこころよく思われぬお坊様も多くおられました、宗論をふっかけられることもあるのです。要らぬ争いを招きたくはないのですが」

「ほんまな。そらジョアンさん、喧嘩弱げなもんなあ」

たえも真面目にそう言つて、しばし考え込んだ後、「ほんなら、湊まで行かんでも、うちでやったらええわ。朝、お客さんが出ていった後やったらわりあい空いてるさかいな。おなご衆も暇やさかい」

「さようございますか。それは誠に有り難う存じ

ます」

憂鬱顔を解いたジヨアンは、胸に手を当てて深々と頭を下げた。その様子を、回りの客が物珍しげに眺めていた。

「ぬしもまあ物好きやな。なんでパーデレさんの話なんぞ聞きたいんや。そない暇でもないやろ」

夜、たえの話を聞いた東次郎は、なかばあきれたように言った。

「まあお前さま、どんな話も聞いてみなわからへんやないの。御利益のある話かもしれんし。あの若い人やったら、そない悪い話はせえへんと思っわ」
とりなすように、たえが言う。東次郎は軽く溜息をついて、

「まあええけどな。お客さんの邪魔にならんようにしいや」

「へえ」

たえが頷くのを見て、東次郎は、この話はこれでお終いというように立ち上がり、寝間に行くのかと思えば、部屋の外へ向かった。たえはその背中に向かって

「お前さま、どちらへ」

「さきのとじや」

当たり前のように、振り向きもせず言って、東次郎

はさつきと出て行った。

さつきというのは、別棟に置いている女たちの一人
で、東次郎の気に入りである。しばらく前に売られ
てきた女だが、たえより少し若い二四、五の女盛り
で、色白のほっちやりした肉付きが、客にも受けが
よいらしい。東次郎はこのところ、三、四日に一度
はさききの部屋で寝ている。

後添えとして女房に収まっただけでも、たえとて
も同じ境遇で、いつ、その座をさきにとつて変わら
れるかも知からない。しよせん東次郎の気分次第で
ある。後妻に入つて三年になるのに、まだ子どもも
できない。子どもがいれば、少しは東次郎も自分を
重んじてくれるだろうにと、たえは、東次郎の背中
を目で追いながら、毎度らちもない繰り言を繰り返
していた。

一人、寝間に入つて横になると、たえはふとジョ
アンとの会話を思い出した。なぜあの若者にこれだ
け親切にするのか、我ながら不思議だったが、

（なんやろなあ、ちつと性根の良さげな若い男の役
に立つんがうれしいんやろか）

と、少しばかりくすぐったい思いに結論づけたのだ
った。

明けて次の日の朝、泊まり客がひけて静かになつ

たのを見計らい、ジョアンは階段を下りて板敷の間に行つた。

たえは、聴衆が多い方がよいだろうと気を遣つて、別棟にいる女達を起こしに行つた。明け方近くまで客の相手をしていて、寝入つて間もないのを起こされ、とりあえず髪をくくつただけの女や、小袖を引っかけただけのしどけない姿の女もいる。その中にはさきもいたが、たえの前でも眠そうな顔を隠そうともせず、一重のぼつてりした目をしばたたき、頭をぼりぼり搔きながらやつてきた。たえも特に何も言わない。

手の空いている下働きの下男や女中や、逗留が長引いて暇をもてあましている泊まり客も数人、何事かと寄つてきた。てんでに板敷に座り込んだ人々の真ん中に、ジョアンは、特に緊張するふうでもなく、黒衣に身を包んだ細い体で、すらりと立つた。そして、興味深げに見上げている人々にこりと笑いかけて、ジョアンは口を開いた。

「私は天に御坐す大いなる父デウスにお仕え申す者、イルマン・ジョアンと申します。今から私がお話し申し上げるのは、おそらく、皆さま方には耳慣れぬことでございます。私が伝えるのは、御主デウスの坐す天の御国に至る道です。後生来世に扶かる道の掟を広めること。これが我らの務めであり、

一人でも多くの迷える人を導くことにより、我らが天の御国に続く道もまた近くなるのです」

決して激しい声ではなかった。どちらかと言えば静かな、しかしよく通る理知的な声である。言葉の一つ一つが明晰で、人に語りかけ、その心を開かせることに慣れた口調であった。

「へええ」

と、たえは内心で感嘆の声を漏らしていた。

「御主デウスとは、天の主、天帝であります。かつまた、この天地を作り給いし大いなる御意志であり、我ら民草を憐れみ給う慈悲の心でもあられます」

「そのデウスさまいうのが、天主教のご本尊かいの。阿弥陀さんみたいなものな」

女たちの中の一人が聞いた。

「ご本尊とは言いません。仏さまが大勢あつて、宗派が違えば拝む仏さまも違うというのでもありません。我らが崇め奉るはデウスただ一人。その御意志を我らに弘めんがために、デウスはその御子として、救い主ゼズスキリシトを地に使わされました」

ゼズスキリシトは、イエス・キリストのポルトガル語の読みである。その名を口にして、ジョアンは両手を胸に当てた。

「我らが父なる御主デウスは、我ら人の子すべての罪穢れをあがない給うものとして、ゼズスキリシトとしてこの世に下られました。御主がご出生の折は、民人が望む福を少しも用いぬのみならず、かえって貧を大切にさせられ、貴き後の腹には宿り給わず、貧しき生まれにてあられたビルゼンなるサンタマルヤの御胎内にて人となり給いました。ビルゼンとは夫の道を知らず、未通女なるものとして、サンタマルヤは、夫婦の交わり無くゼズスキリシトを妊み給うたのです」

「ええええ！」

たえも含め、女達は口々に驚きの声を上げた。

「交わり無くいうて、どないして子が産めるんな？」

「それこそがデウスの有り難き御力でございます」
ジョアンは微笑みを絶やさず、言葉を継いだ。

(以上4月18日放送分)